

# 小田原史談

第173号 史談会  
 小田原市栄町2-13-20  
 発行所 小田原市栄町2-13-20  
 アオキ画廊内 電話(24) 0637

あつたと言われ  
 ます。  
 早速、日本  
 歴史地名大系  
 『愛知県の地  
 名』(平凡社  
 刊)で星崎城  
 を調べると、

## 鴨宮を発祥とする

### 星崎姓について

石井啓文

拙著『古文書にみる鴨宮村の人々』を読まれた、旧下新田村にご実家のある星崎氏から、次のような話を聞かされました。

星崎城が滅亡したことから山田姓を星崎姓に改めた、と亡父から聞かされており、その経緯が記された文書も残されていました」

「下新田村が牢(浪)人によって、開発されたことを知りましたが、私の先祖は、この本にある下新田村の七郎左衛門で、山田七郎左衛門を名乗り、やはり、牢人であったと聞いております。彼は、尾張国星崎城の家臣でしたが、戦国時代、星崎城が陰謀と裏切りにより滅ぼされ、東海道を江戸を目指して下る途中、この地(下新田村)で、牢人たちによって開墾が行われているのを見て自分もそれに加わり住み着きます。その際、

その古文書は、現在北海道に住んでいる叔父が持つて行ったと聞かされ、それを探しているとも言われています。

話の通り、下新田村の「七郎左衛門」は、拙著から、万治二年(一六六一)・享保二・九年(一七二七・二八)に見られ、明治五・八・九年(一八三三・三六・三九)には「星崎七郎左衛門」とあります。

「七郎左衛門」は、世襲名ですか?と、お尋ねすると、それは、通称で代々「七郎左衛門〇〇」と諱が

現在の笠寺小学校敷地内が城跡と推定される。名古屋市南区本星崎町。信長公記に「天文二十二年(一五五三)山口左馬助同九郎二郎父子(中略)笠寺云所要害を構」とあり、笠寺台地の一部に城塞が築かれた。これが、織田・今川両氏の争いの地点となり永禄三年(一五六一)まで続く。城主は岡田直教・直孝・善同。天正十二年(一五八四)から山口重勝・重政と続き、同十六年 廃城。岡田氏は小幡城(現守山区)の系譜を引く武家で、織田信長・

信雄に仕えた。直孝は信雄の重臣となったが秀吉に通じたことで同十二年殺された(以下略)。

と、あります。

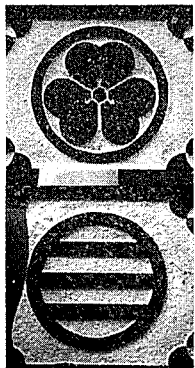
この記述にある廃城の時期(天正十六年)と下新田村の開かれたと言われる天正から慶長期とは符合します。また、『日本地名大辞典』(角川書店刊)では、

創築年代・築城者とも不明だが、一説には治承年間(一一七二～一一八三)に山田重忠が築いたともいう(『尾州古城志』(中略)天正十八年(一五六八)小田原合戦では吉川広家が守備し、広家が岡崎に進むと小早川隆景が代った。その後廃城(以下略)。

と、あります。

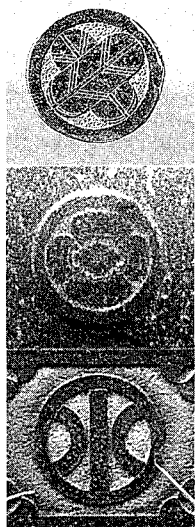
この書では一般的な姓については、源〇〇流・平〇〇流等と記され、数通りの流派に別れ、ほとんどの姓が源平藤橘と言われる、源氏・平家・藤原・橘のどれかにたどり着くと言われているだけに、この記述のみにはいささか驚かされます。

### 星崎家の各家紋



丸に片喰

丸に三引



丸に違い鷹羽

丸に木瓜

丸に?

と、あります。

この記述にある廃城の時期(天正十六年)と下新田村の開かれたと言われる天正から慶長期とは符合します。また、『日本地名大辞典』(角川書店刊)では、

創築年代・築城者とも不明だが、一説には治承年間(一一七二～一一八三)に山田重忠が築いたともいう(『尾州古城志』(中略)天正十八年(一五六八)小田原合戦では吉川広家が守備し、広家が岡崎に進むと小早川隆景が代った。その後廃城(以下略)。

と、あります。

この書では一般的な姓については、源〇〇流・平〇〇流等と記され、数通りの流派に別れ、ほとんどの姓が源平藤橘と言われる、源氏・平家・藤原・橘のどれかにたどり着くと言われているだけに、この記述のみにはいささか驚かされます。

星崎 ホシザキ 尾張國に星崎郷ありて武蔵等に此の氏存す。

と、あるのみです。

更に、国立国会図書館で『新編姓氏家系辞書』(著者 太田亮、編者丹羽基一 秋田書店 S・六三・二五第六版)を見ると、

星崎氏 相模(出自未詳)足柄下郡鴨ノ宮より起こる。一村星崎姓、家紋梅鉢。

と、記されていることは更に驚かされました。

最近、角川書店から『角川日本姓氏歴史人物大辞典』が、各県版で出版されています。この神奈川県版である、『神奈川県姓氏家系大辞典』(H・六・四八)には、

星崎 ほしざき 足柄下郡矢作村(小田原市)の名主に星崎家があり、天保五年宇右衛門が農業精励などを小田原藩より賞され、一代限り苗字・脇指・袴着用が許された。同家には、以後、慶応三年まで苗字帯刀の免許状が伝わる(県史資5、県史別編1・2)。足柄下郡下府中村(小田原市)矢作出身の星崎定

五郎は、明治年間にアメリカに移民して成功、小田原城内には定五郎の寄付によって建設された星崎記念館がある。

と記されています。

この各県版は現在、刊行中であり、これまで神奈川県他に、宮城・群馬・山梨・長野・富山・静岡・愛知・山口・鹿児島・沖縄の十県版が発行されていますが、いずれの県にも星崎姓の記載はありません。

また、『全国名字辞典』(東京堂出版)・『静岡県の名字』(静岡新聞社)・『栃木県の苗字と家紋』(下野新聞社)にも、星崎姓の記載は全くありません。ということは、姓氏家系辞書の記述を裏付けていると言えます。そして、同書記述で「一村星崎姓」とあるのは、矢作村を指しているものと推察します。

しかし、同村に星崎姓が多いことは当市では周知の事実ですが、かつて、全村民が星崎姓であったということは聞かれず、そうした資料もありません。おそらく、辞書では強調するため表現になったものと思わ

れます。

同村は江戸時代以前、下新田村の開発より早く、後北条氏の頃に開かれていたと言われており、両村にある星崎家の菩提寺は異なり、家紋も、剣片喰・丸に三引・梅鉢等相違しています。

また、古文書から上新田村組頭市兵衛も星崎姓と判明し、同村名主新左衛門も同姓で、両家ともに冒頭に記した下新田村星崎七郎左衛門家の系統と言われています。こうしたことから、

両村の星崎姓は別々に起ったものと思われま

す。因みに、小田原市と同市

以外の神奈川県内、それに

武蔵国である東京都、そして、星崎城の廃城後、星崎村から星崎町の名が残る名古屋市の星崎姓を電話帳で調査すると左表になります。

横浜市の二十二や県内市部は、東京同様一地域に集中することなく分散しており、都会への流出と考えられ、名古屋市には全くありません。

小田原市内で下新田に近接する鴨宮・南鴨宮・上新田を下新田グループと考えればその合計は二十になり、矢作村と下新田村を中心に、水面に小石を落したときに

できる波紋状に分布して行ったことが推察できます。

従って、『姓氏家系大辞典』で「武蔵等にこの氏存す」とあるのは、「相模」の間違いで、家系辞書は大辞典の改訂版と理解できます。これに冒頭の星崎氏の話が立証されれば、星崎姓は、偶然、矢作村と下新田村の極めて近い二村で、それぞれ別々に起ったことになりま

す。いずれにしても、星崎姓が他都道府県の歴史や武士階級に全く見られず、神奈川県内の鴨宮で起ったことと言えます。

(了)

§ 電話帳にある星崎姓

H.9.7.27 現在		H.9.7.27 現在	
小田原市81	神奈川県 81	東京都 24	
矢作 21	横浜市 22	町田市 4	
鴨宮 8	南足柄市 7	立川市 3	
南鴨宮 5	大井町 7	杉並区 3	
上新田 5	藤沢市 6	八王子市 2	
下新田 2	大和市 6	世田谷区 2	
酒匂 4	平塚市 5	清瀬市 1	
西酒匂 1	川崎市 5	保谷市 1	
扇町 4	秦野市 3	武蔵野市 1	
東町 3	大磯町 2	昭島市 1	
栄町 3	中井町 2	港区 1	
国府津 2	二宮町 2	台東区 1	
飯泉 2	湯河原町 2	江戸川区 1	
小八幡 2	相模原市 2	板橋区 1	
府川 2	横須賀市 2	荒川区 1	
曾比 2	箱根町 1	新宿区 1	
新屋 2	松田町 1	名古屋市 0	
中里 1	厚木市 1		
南町 1	伊勢原市 1		
城山 1	茅ヶ崎市 1		
浜町 1	三浦市 1		
寿町 1	愛川町 1		
蓮正寺 1	津久井町 1		
久野 1			
飯岡 1			
小田 1			
下大井 1			

# 小田原叢談 (三十一)

## 石井富之助

### 畑の平の富士

野上弥生子氏(二八五)元(公彦)が「秀吉と利久」を書く、その調査のために中央公論社の藤田圭雄氏とともに図書館に来られたのは昭和三十五年(二九〇)の春だった。

図書館で、秀吉の小田原攻めやそれに関連する郷土資料などについて話している時、野上さんは、

「利久が古田織部に宛てた手紙の中で、あなたは隅田川、筑波山、武蔵野などのよいけしきが見られてうらやましい。自分は、富士山を見るだけでまんするほかはないといっています。箱根のこちらがわで富士山の見るところといたるところでございましょう。」

ときかれた。

千利久が小田原から武蔵を転戦している古田織部に宛てた手紙は国立博物館所

なかったのは少々ウカツであった。さっそく調べてお知らせしましょう、とわたしは約した。

一応調査が終わって、鈴木十郎市長にあいさつに行くというので、市長室に案内した。

あいさつが終わるとすぐわたしは「富士の見える場所」を市長に聞いて見た。

すると市長はこともなげに

「ありますよ、今石垣山のうしろの畑の平というところにゴルフ場を作っているのですが、そこから見えますよ。」

と写真まで出してきた。

今まで思いもかけないことであったが、たしかに富士が見える。その写真はゴ

ルフ場から西北の方角を写したもので、右に塔の峯、

左に湯坂山から奥の山々が見え、その左側の方の山の肩のところに富士が顔を出しているのである。

畑の平から富士が見えるならば、畑の平こそ利久の仮住居としてまことにうってつけの場所である。

野上さんは利久の居所を畑の平ときめ、「秀吉と利久」第九章にその情景をつぎのようにみごとに描写した。

石垣山と早雲寺とのちょうど中間にあたる畑の平に、湯本の物もちが建てた隠居所である。ながらく空いているのを修繕させたりするうちに、利久

も次第に快い方にむかひ、移転は、病後の静養とともにめづらしい閑居となった。

家は八畳、四畳半、三畳に、台所のついただけ、このあたりでは一带にさうであるやうに、

板葺の屋根を太い割り竹で押えた田舎普請である。利久は小細工のない作りをいっそ好いとしたり。なおそこからだと富士が見えた。これは早雲寺からは見えなかったもので、石垣山のお城さえ、箱根の連山にさえぎられて富士の眺望には欠けている。

利久のあたらしい家とても、富士を富士とする頂上、中腹、裾野へと、末ひろがりに流れる美しい傾斜線は仰がれず、石垣山につづく背後の峯の右寄りに、もろこしの絵に描かれた駱駝というけもののおろに似て、まるくのぞいてゐるに過ぎない。

古田織部への手紙の内容がよく生かされているし、ここから見える富士をらくだのこぶのようだとはまことにおもしろい表現である。さらに板ぶき屋根も、いわゆる小田原ぶきを念頭においてのことで、その配慮の細かさには驚かざるを得ない。

(続)



カット 内田美枝子

# 弔辞

相澤さん、あなたはとうとうわたしたちの前から姿を消されましたね。わたしの受けた連絡によりますと、一月一四日の午後一二時一五分、安らかに眠るがごとくに大往生を遂げられたとのこと、いかにも相澤さんの人柄をよくあらわしたこの人の世とお別れだったと思います。しかし、わたしたちにとつては、「惜別」の情、止みがたきものがあります。

一月一五日、この温暖の地、小田原にも雪がふかぶかと舞いおりました。ときには乱舞するかのようなこの雪は、「誠実一路」に人生をまっとうされた相澤さんに愛惜の念、哀悼の意を表しているようでした。その美しい白銀の音色は、相澤さんへの「鎮魂」のメロディーのように聞こえました。

相澤さん、あなたの八十九年余りにわたる人生は、とても「常人」にはまねることのできない充実した生涯だったように思います。

相澤さんは、神奈川県立小田原中学(現小田原高校)を第二一回生として卒業され、「生活者」としての第一歩を踏みだされたわけです。相澤さんは、生涯現役としての職業人だったわけですが、たんなる「生活者」ではなく、同時にすぐれた文化人としての道を歩まれたことは、皆さんに広く知ら

れております。実際、日々の仕事に精をだされ、文化にふれあい関心を寄せられることは並たいていなことではありません。また、お若いときには、地方の文化の向上のために、文化活動に身を投じ、苦勞されたこともあるようです。「演劇をつうじて知性を」と芳演に尽力されたのも、そのあらわれです。

相澤さん、あなたとはじめてお目にかかったのは、いつであったのか、どういうきっかけであったのか、正確には思いだせません。おそらく、相澤さんが還曆を迎えられたころだったとぼんやり覚えておりますが、以来、折々に話を重ねるほどに相澤さんの抜群な記憶力とすぐれた観察力には驚くことばかりでした。

相澤さんは、「雄弁」とはほど遠く、どちらかというところ、口数の少ない「訥弁」型でしたが、かえってそれだけに一つ一つの言葉に含蓄がありました。哲学がそなわっていました。わたしは、また、相澤さんは街の「語り部」ではないかとみてきました。

「語り部」こそは、地方文化の正当な伝承者です。その「語り部」相澤さんから、わたしは実に多くのことがらを教えていただきました。たとえば、かの慶應義塾の創立者で、世界にその名を知られた明治時代の啓蒙思想家福澤諭吉はいくつかの顔をもっていました、

これを「インターフェイス」と呼びますけど、その福澤の一つの顔にわたしは「経済指南家」と命名したのは、いつか相澤さんが福澤と小田原のある人物とのかかわりを話されたことがヒントだったわけですよ。

相澤さんの「語り部」は、閉じられた小田原地方に話題を限定するのではなく、視野の広い点に持ち味があつたと思います。小田原に足をすえながら、この地に閉じこもることなく、晩年の晩年にいたるまで、相澤さんは東京に目配りをされていました。わたしは、夕方近く小田原駅頭で観劇のため上京される相澤さんに、なん回となくお会いしたことがあります。

しかし、相澤さんは新劇などだけでなく、文学・思想などの各分野につうじ、ある意味では新しいタイプの「語り部」でした。スケールの大きい「語り部」でした。

その「語り部」の蘊蓄をひきだすべく、もうかれこれ一〇年以上前になります、わたしたちは「田毎」のお宅にお邪魔して大正年間から今日にかけての虚々実々の小田原文化の動きについてのお話をうかがったことがあります。

このインタビュは、小田原の文化の流れを検証しなおそうと目論んだものです。そのときの相澤さんの語られる小田原の風景の再現力はまことに目を見張るようなストーリーでした。しかも、話はそ

のことにとどまらず、相澤さんの幅広い交友関係がみごとに浮かびあがってきましたし、さらに、相澤さんの個人史が語られ、わたしたちは唸りました。

相澤さん、そのとき感じたことですが、あなたの人生は「波瀾万丈」そのものでした。だからこそ、相澤さんは正邪を腑分けし、人間を信じる眼をもちえたのではないのでしょうか。また、あの小柄で細身な体形に似つかわしくないほど、強靱な精神をもちえたのではないのでしょうか。

相澤さんとおつきあいは、「長かったのか」、それとも「短かったのか」複雑な思いがいたします。ただ一つ明言できるのは、典型的な明治人が、わたしたちの目の前から姿を消したということです。

わたしは、いま「会者定離」という言葉のむづかしいかんともしがたい重みを噛みしめています。相澤さんとお別れは、大きな星が水平線の彼方に消え去っていったような一抹の寂寥感を禁じえません。

いまは、ただただ相澤さんのご冥福をお祈りするばかりです。相澤さん、本当にありがとうございます。あのやさしく、その反面「頑固」なバック・ボーンをいつまでも保持され、文化の香りをただよわせながら、どうぞ安らかにお休みください。

一九九八年二月一日

金原 左門

# 相澤榮一さんを偲んで

岡部 忠 夫



ありし日の相澤榮一さん

相澤さんが、小田原史談  
会会長になられましたのは、  
昭和六十三年（一九八八）から  
平成二年（一九九〇）迄の一期  
二カ年間で、あとは顧問を  
務められました。

顧問になられましても、  
会の事をいろいろと考えら  
れ、適切なご指導・ご助言  
を頂きました。誠に有り難  
うございました。

会長になられる二年前の  
昭和六十一年のことです。

小田原史談会の機関紙『小  
田原史談』の充実を計るた  
め、賛助会員を募りました  
とき、相澤さんは、賛助会  
員になろうと申されました  
が、普通会员の他に余計な  
会費を支払って頂くのは申  
し訳ないと考え、遠慮した  
ことがありました。もった

も、昨年度はどうしても  
『小田原史談』の増ページ  
の必要から賛助会員になっ  
て頂きましたが……。

相澤さんは、小暮次郎さ  
んと無二の親友でした。小  
暮さんは、「チンチン電車」  
のアニメーションや画集  
『小田原古きよき頃』を残  
された方です。大正大地震  
後、小暮さん一家は、東京  
に引き払われましたが、小  
暮さんは小田原に居残り、  
相澤さんは、小暮さんのた  
めに自宅を提供され、県立  
小田原中学校を卒業するま  
での一カ年ほど、起居を共  
にし、小田原中学に通学さ  
れました。

このことは、勿論、両家  
のご家族の理解があって出  
来たことですが、相澤さん  
に厚い友情があつたのこと  
です。それはまた、相澤さ  
ん、貴方の人柄を語るに充  
分なものがあります。その  
優しい思いやりは、他の人  
にも及んでいます。その思  
いやりには義侠に通ずる心  
があります。

相澤さんは、芸術・文芸  
への関心を持たれ、趣味に  
幅広いものがありました。  
川崎長太郎との交友は、彼  
がまだ有名でない頃からと

聞いております。また、相  
澤さんは、「田毎」の経営  
の傍ら、市民の方々に優れ  
た演劇を見てもらおうと、  
「小田原労演」を組織だて、  
文化活動を実践されたこと  
もあります。それに、その

信条や思想に進歩的な点が  
見受けられました。また、  
正しくないことには、正し  
くないと、ハッキリ自分の  
意見を述べられたことが、  
何回かあったことを覚えて  
います。優しい気持ちのな  
かに、一つ信念を貫いてお  
られました。

相澤さんは、昔の小田原  
のことをよく覚えておられ、  
生き字引と申しても決して  
過言ではありません。

街のいろいろなことを記  
憶されていました。大正時  
代、小田原町の多額納税者  
四、五人の名が、何かに載っ  
ていました。その人たちは  
貴族院議員を互選する資格  
を持つ人達でしたが、私は、  
何も知りませんでしたので、  
相澤さんに尋ねますと、す  
ぐさま、どのような経歴を  
もつ人か分かったことがあ  
ります。

相澤さんに最後にお会い  
しましたのは、昨年の、小  
春日和の小田原城趾だった

と思います。娘さんの押す  
車椅子に乗っておられまし  
た。その折、話された言葉  
を今も覚えております。

「まだ書き残したいことが  
あるが思うように手が使え  
ない」と言われたのです。  
しかし、相澤さん貴方が  
遺された記録は、永遠です。  
後々の世に素晴らしい資料  
として活用されることと信  
じて止みません。天寿を全  
うされました相澤さん、ど  
うか安らかにお休みくださ  
い。

## 【故人略歴】

明治四十一年（一九〇八）三  
月一日、父相澤富次郎、母  
相澤トクの長男として幸町  
（現住所）に生まれる。大正  
十五年（一九二六）三月、神奈  
川県立小田原中学校卒業。  
家業の防水布業を好まず、  
養兔業を始め、昭和十二年  
（一九三七）頃には漆器製作の  
「箱根工房」を営む。戦後  
「箱根工房」を再開。昭和  
三十一年から手打ち蕎麦う  
どんの「田毎」を開業。傍  
ら同三十七年から四十二年  
迄、「労演」の文化活動に  
係わる。八十五歳迄本業に  
従事。平成十年一月十四日  
死去。享年八十九歳。

## 震災日記

⑫

## 片岡永左衛門

大正十三年

一月十一日 晴

昨夜も又地震、大震以来四カ月余なるも、大小は有るも殆ど毎日なり。近来に至り井水何とも減少し堀り替えれば、何れも一間位で出水の箇所降下せり。地震に就いての変調なり。

十二日 晴

帰途役場に立ち寄りしに宮内省より当町に御下賜の当御料林の震災損木二百二十本の売り払い入札にて多数集まり居り、其の傍らに多数の慰問罐詰の処分中なりしが、これが十月中にも到着せばさぞ喜びたるべきも、今日に成っては物資も充実し来たりたれば、現金の方が取扱者も受くる者も両得にて、贈る者は相当に出資し、募集する者は非常に努力し、受くる者は時期を失したれば、贈る者の思う程に有難がらぬは両損。とかく官吏の仕事は形式に流れるは困ったもの。しか

れども形式を無視すればその間に、又、不正不都合起

こり是も又困ったもの。繁は繁の弊、簡は簡の弊が伴い致し方なし。されども罹災者は、慰問品には多大の恩恵を蒙れり。

慰問品の配給は、震火蒙る者に重きを置き、倒壊者は何十分の一の割合にて、我が区内は焼失は皆無の為

慰問袋も一個宛は渡すを得ず、袋を解き其の物品を籤取りとなし、拙宅など一度に甘藷三本だの粗紙二帖だの草鞋一足などにて、ゴム底の粗末なる草履一足と罐詰一個の両度が一番にて、少なきは梨二個の時も味噌少々の時も有り、此の付近は各戸大差は無し。是不平を漏らすに非ず、当时に実況を記したるなり。

十三日 晴

昨日は、夜にかけ余震四、五回に及べり。

西山歯科に治療を受け行きしに、東京各大学の駅伝マラソン競争にて道筋は一

寸賑わう。

東京・箱根間の駅伝競争は、大正9年に始められ、小田原の中継所は本町の小伊勢屋前であった。

各地より大工も入り込み来たりしも、腕も有り確実の者は甚だ少なく、下手の間に合せのみ多く工事を任せて不平の者多し。大工の仕事も東京より静岡辺迄は此の地方の仕方と大差無きも、其れ以外の遠国者は仕上げが何と無く器用にて途中にて中止せしもありたり。午後、縁談にて江ノ嶋・間宮氏二人にて来談に付き早川・真福寺に河部氏と行き四時帰宅。間宮氏も其の挨拶を聞いて帰る。

十四日 晴

松原神社例祭にて葉付けの竹を立てるも、七五三を張りたるを神燈を吊るしたるも、子供の集まり太鼓を打ち囃せし町もありしが、夜に入るも淋しくし、理髪して参拝せしが鳥居前より境内に露天の商人も常より

少なし。仮建ての宮居は白く月の光り浴し却って崇高なり。

みつ垣の内外は地震の跡とめて仮の宮居に澄る月かけ

十五日

午后より雨模様

前五時四十五分強震と思う間に電燈消え棚より物の落ちる音に驚き戸外に逃げ出ししに余震度々有り。

暫くして内に入り蝋燭を付けて見れば、時計は止まり、仏壇は前に墜落し、手洗鉢の水は四面に流落し、台所は器物乱雑に倒れたるも、其の他格別の事無きも宅地内の地所にも亀裂を生じ井水は濁る。戸外に火を燃やし暖を取り居りしに、亮司、関四郎見舞いに来る。

市中は所々新築に倒潰もあり、大震に引き起こし修繕せし家も倒壊、半潰、亀裂も有り、轉々停車場付近に多く、少し傾きしとか、壁を落とし数寸動きしなどは多くあり。

電話も不通、汽車も夕刻迄は不通、市内電燈は復旧せしも、自宅には遂に来たらず。

夕刻、吉浜より庄吉来たる。庄吉本名加藤庄五郎は明治二十八年に吉浜村の共

有原野五町歩を、年五百円の借地料にて温州開園の見込みで借地し、其の後に村方の都合により五百円で買い受け成墾せしも、遠隔の為利益少なきを予想し、適地一町歩余と宅地百五十坪余を残し、其の他は希望者に売却したが、その着手の明治三十一年に下郡の北ノ窪より夫婦で移住し開園に従事したが、年を重ねるに随い収支の判然したので、時期を見て売り放す事としたが、庄吉より譲り受けたしとの談話ありしに、作物には不利なりしも、売地には他の小作人の監督もなく相應の利益を得たので、畑を式千円で売り渡し、多年一日の如き篤実の功勞に報い、金五百円と宅地を無償にて譲ったので、是を誇りとなし自分の今日有るは、自力でなく皆片岡の保護なりしと□□□□余を顕し諸人に談話し、御蔭で独立の百姓と成ったと毎年盆暮と彼岸に柵を持ち来りしが、此の御恩を子孫に伝える為に石に刻し度くと記文を懇請せしも、其の俣になせしに、度々の事にて止むを得ず書き与え、昨年春頃にか出来し一覽をと云われ行事に

せしが、未だ見ぬ先に震災に破損し、又再建したと云うので、此の度は是非行事に約束して帰したが、記文は其の当時の日記にも記載したが、是も焼失し今は失念した。

十六日 晴

昨日より松原神社神輿各町を渡御。神輿は焼失に付き仮に白木の宮を急造し、白木の台に載せ数人の白丁にて静かに昇ぐ。例年は漁夫數十人にて騒然として所謂お祭り騒ぎになるに引き換え返って神威を感じず。祭典に加え諸職人休日なれば昨日より市中賑わう。

十七日 晴

重役会にて藤沢本店に行き六時帰宅。  
一昨十五日より、神奈川県社会課の主催にて小田原託児所を開所せり。

十八日 晴

河部氏の悔やみに行き。銀行に立ち寄り、歯の治療の為午後より欠勤。  
龍夫の徴兵適齢届をなす。今日、岡田方に預け置きし荷物を取り寄せ、其の内雅邦の幅を取り出し壁間に

掛け、梅花を瓶に挿し前に置けば、一服に心も落ち付きを感じ、一首と思いしも歌は出来ず。

十九日 晴

出勤、執務中朝日新聞派出員鶴田氏より在否聞き合わせの電話来た。暫くして来訪、何か歌でもお出しに成りましたかと聞かれしも、別に思い当たらず。されど今年は新年言志を詠進せしを談話せしに、実は社より電話ありしも甚だ不明なるが写真をと云うので写真屋に同行を乞われ、其の帰途、時事の小林君の来て呼び止める。今銀行にお尋ねしたがと又写真の請求。是では事実かと又、写真屋に同行して、銀行に帰ると今度は日日の糸柳が来て、電報を見せしにシセン(次選)と有り。又写真を乞われ丁度三度写し、帰宅すると高等女学校長の峯氏次選の祝賀に来たり恐縮した。耳よりなれば晩食に湯豆腐にむろ鱈の乾物で細君とブドウ酒一杯の祝杯を挙げた。夜に入り東京・親一より次選の祝電あり。続いて亮司来たり賀し、吉田より祝意の手紙来る。

廿日 晴

御歌会奉行より次選の通報を受け、先君に墓参す。午后より返礼に吉田氏に行く。帰宅後、林泰造氏より次選の和歌を乞い来たり直ちに書送す。  
過日米伊多利亞の某の十五日、廿日の地震を予言せしに、十五日は適中せしとて昨日より人心恟々流言にも困る。

廿一日 晴

いたずらに走る  
ねずみの足音も地震か  
と思う夜半もありけり  
重役会に出席、五時頃帰宅。  
諸々より次選の賀章来る。  
高田尋子よりは、父上様には限りなき御よろこびの事と、私共迄も本年は幸多き事と思われると、よろこび来る。

徳富先生よりも祝詞来る。  
本日の国民新聞神奈川第二版には、  
片岡氏の詠進歌次選に入る  
十九日、宮中鳳凰の間に於いて行わせられた歌会初めに次選の榮譽を得た小田原

町緑町片岡永左衛門氏は小田原本陣として名家の旧家で、在昔諸公の旅舎に充てられ維新志士も悉く出入し、元老西園寺公の如きは、其の宿泊に当って芸妓を侍らし、当主永左衛門氏から当家は料理店ではないと手強く談判を食らった程で、恬淡な其の気は一般から愛せられて居た。且つ隠れたる歴史家として識者間に知られ、我が国民新聞社長徳富蘇峰先生の近世日本国民史にも多くの資料を提供された程である。然し、歌道に於いて此の才能を有する事は、猶、世に認められていなかったたので、今更ながら同氏を知る人の総てが舌を捲いている。

芸者を呼ぶと云うので早速番頭に断らした。すると、是非と云うので拙者自身出て断ると、なぜ呼ばぬか芸者はわるい者では無い。死んで生まれ替わったら、おれも芸者と思うと、愚弄して来たから、あなたはよろしいが種々の要事で旅行する者、急用で早立ちするもあるに隣席で騒がれては安眠が出来ず、それで一切彼等はいれぬ事で、其の人の身分に依って左右することは出来ません。是非と望みなれば御宿泊をお断りする、他に料理屋に宿替えをと強情に出ると、隣席に居るは誰れかと聞くので、東京府知事の渡辺洪基さんだと云うと、高声に渡辺さんと呼び懸けると、渡辺さんが今仲裁をと思ったか、此の家は君の言う事を聞かんよと云った。  
すると、公が実はここに連れた女の知つとる女が高橋屋ところに芸妓して居るに逢い度い云うので、芸者と云ったと本音が出たので拙者も只御用の方なら何人にもお呼びしますが、芸妓の商売ではと双方笑って、其の女を呼んだが、公の連れて来たは新橋辺の芸

昨日の地震の流言で銭湯に入る者も少なく、出歩く者も少なかりしと、又、厚木辺では、屋外に露宿するも多かりしと、当地にもその如くも有りしならん。  
国民新聞の記事に、西園寺公とある事実は、明治十五、六年頃でも有りしか、西園寺公が男女三人で泊まられた。従者の一人は、華族の従者相応せし服装で、上下共に縞物を着して居た。

者で、一人の従者は箱屋だ。翌朝御飯がすむと、座敷に出て昨夜は甚だ失礼で御立腹をと挨拶する、笑いながら何か服などと云われるので、御立腹なくば是非御帰りに御立寄りをと云った。それより一週間も過ぎ熱海の帰りに腹たてぬから寄ったと、中食して帰京された。それを何かの折に先年、徳富先生に噺したのをよく覚えて居られた。

序に少し長くなるが、当時直接に面語した方々の事を記憶を辿り書いてみる。

三条実美公は、毎度御婦人同伴で熱海、箱根入浴には必ず休泊にて、其の度に毎々是れも必ず御挨拶に出たが謹敵の御様子で有ったが、別に是と云う御談話も申し上げた事も無い。是は拙者の若年時代で話題を知らぬに原因もする。

或る年に熱海に御入浴に幅と額の御揮毫を願った。

御帰りに出来る事と待つて居ると御帰りは御中(食)に御寄りになり、家扶に聞くともまだ出来ぬが今夜木質に御出になり、明後日はお帰りに御寄りになるがそれ迄には出来ようとの事、果

して御帰京の途に御寄りになり、御揮毫に添えて仕立料金千疋を下された。今も其の額は所蔵している。此の仕立料と云う事は、定宿の本陣に袴地や書画を下される時は、大名などは下されたものだ。

山県有朋公も度々御休泊で、是も或る時に額を願ったが紙の半切を添えて下され、今も是は所蔵している。

大隈侯も度々休泊で、此の旅行は、此の頃では一党の大業で随行従者は二十余人で大いなる大名華族のような大騒ぎで、大蔵卿の時は、入浴中に三菱会社などでは二、三度位も社員が三尺位の大菓子折りなど持って見舞いにかけて大したものも有った。

井上馨侯も度々来られたが、何だか物事がいかつく自然と下品に感じた。

伊藤公は、また福落で、幅を願って御泊まりの時に出来、其の後に又御泊まりに額が出来たが、其の時は印の持ち合わせず帰京の上捺すとの事だが、持ち帰ると来合わせた者に持ち去らる

る恐れが有るので、其の俣にして今も無印で所持している。幅は震災に焼失した。滄浪閣を小田原の海岸に新築してから東京より九鬼隆一其の他が来て中食された。其の時に伊藤公は、九鬼は居るか云いながら這入って来ながら、また、おふくろがやかましく芸者はいかぬかと云うので、拙者がいけませぬと云うと、客で来ればよからうと云いながら出て行かれ、二分で三人連れて来られた事も有った。勿論三味線などは持ち込まず、夕刻より一同湯本か塔之沢に行つたと覚えて居る。

黒田清隆伯などは剛放とばかり思ったが、細心な美しい処も有った。挨拶にでると膝を直して談話せられ、又、伯に愛せられて駿東の「御」厨より毎年狷師に行つたが、其の帰りに半襟だけの何か届け来る。是は皆、伯の自身の指図と云う事だ。

感銘したは井上毅君(明治時代前期の官僚・政治家。明治憲法の起草者)で、老母と下女を連れて熱海行きに泊まられたが、御老母は病

中で拙者の座敷に出た時は膝を抱えて居られた。其の時ばかりかと思つて座敷に出た。下女に聞くと、始終抱いて居らっしゃいますと聞いては、有難いような気持ちもした。近來は紳士など愛妻には其の親切ぶりが外眼にも見ゆるも、老親などは余り構わぬも多い中には格別で、宅では親孝行の井上さんと他の井上と区別した。

三浦梧樓さん(明治・大正時代の軍人・政治家)も度々の休泊で親しく談話も伺つたが是は又、真言の信者で大日如来の小像を首に掛けたる事も有り、雲照律師と同行のことも有ったが、其の後に律師の事を伺うと、有り難い律師だと涙を流して種々談話せられた。律師の書も所蔵したが震災に経師屋で焼失した。

谷干城中将も夫人と度々休泊もせられ、揮毫も所蔵せるが、東京の屋敷なども粗末で応接間など他と違い何の飾りも無く、天井も雨浸みて其の俣で総てが質素で、拙者等にたいしても溫和で熊本籠城の主将とは思

われぬ。毎度思う事は、十年の当時に勲章授爵の有りしならば、其の赫々なる武功に對し叙勲も爵位も進んだ事で有ろう。如何なる事も年月の過ぎるに随つて自然に刺激を減ずるので、後年の制定故に余り優等では無く、物足らぬに思われる。

岩倉公や乃木大将も休泊せられしも、是と云う程の記憶もないが岩倉公には揮毫を願つたが出来ぬ前に逝去となる。

大久保公も元田永孚先生(幕末・明治前期の儒学者。明治天皇の側近)も御泊や御休みも毎度だった。大久保公にも揮毫をねがったが是は出来ず。元田先生は額を今も所蔵して居る。

九条道孝公も毎度御休泊にて、現皇后陛下も入内前に御同行も有った。此の時には、最早御夫人はお隠れで侍妾の中川様が御供で中川様の鼓で公の蟬丸の花の都の仕舞は毎度拝見した。此の中川様は皇后陛下下の御生母で容色もよく聡としたように見受けた。(続)



# 丹沢の植物

35

城川四郎 きがわしろう

真夏の太陽が照りつける丹沢は暑い。最高峰の蛭が岳でも標高千六百七十メートルで、二千五百米以上の山々が連なる北アルプスの尾根を歩く爽快さとは違うと思いつながら、丹沢主稜の険しいアップ、ダウンを喘ぎながら歩く。丹沢の山の急斜面には、関東大震災時に発生した山崩れ跡の崩壊地が多い。

そんな崩壊地をガレ場と呼んでいる。尾根を行く登山道の片方は急斜面のガレ場になっている地形も少なくない。そんな場所で、赤い花が咲いているのを見つ

けることがある。丹沢で植物を学びはじめた頃、かなり危険を冒してその花を調べにいった思い出がある。その花の名はピランジ。この植物は川原やガレ場に生え、夏ごろ紅紫色の美しい花を咲かせる。茎はふうう三十糎ぐらい、基部は倒れ上部が立ち上がる形のものが多い。生える場所が風通しのよいところばかりだから、花と語らないながら一休みするには格好の相手である。しかし、写真を撮るのはたいへん苦労する。あまり風が無いと思っていた時でも、カメラを構えて

ファインダーを覗いて見ると、華奢なからだつきのピランジは休みなく風に揺れ動いているからである。この植物は本州関東地方西部から中部地方にかけてだけ分布するもので全国的には比較的分布域が狭い。神奈川県では丹沢山城のガレ場や陽当たりの良い河原にだけ分布し、箱根で記録がない。ピランジとは奇妙な名前であるがその名の由来はわかっていない。

このピランジには萼や茎の上部にふうう腺毛を密生するが、腺毛が出ないで茎がやや高い種類にオオピランジと呼ぶものがある。丹沢にも腺毛の出ない個体をいくつか見ているが、その茎は高くないのでどう扱うべきか判断に迷っている。

ピランジ (なでしこ科)  
Silene keiskei var. minor



筆者原図

## 移るふ景観

### 城山にて



荻窪に接する谷津の台地(城山一丁目)の稜線上には、『大日本国誌』に載る華嶽城があった(『小田原史談』No.158参照)。付近には「金の台」「城下」と云う小名が残っている。城と云っても小田原合戦の際、北条方の監視哨が置かれた程度のものであったろう。ともかく、当時としては戦略的な場所であったと思われる。現在では稜線上にまで民家が迫っている。家が盛んに建てられるようになったのは、昭和30年代以降のことで、この地域に上水道が引かれるようになる迄は家は無かった。写真の手前は「鐘の台マンション」の建設地で既に2月11日からマンション購入予約が始まっている。右手の建物は宗円寺。(本年1月31日撮影)

# 曾我谷津の宗我氏と

## 曾我氏とその末裔(6) 付菊川の事

市川 一郎

はしがき  
宗我神社

### 一 本宮

曾我氏台頭 曾我氏の出自

### 北条時代

(小沢大明神)(八幡神社)(桓武社)

豊臣氏時代 徳川時代

明治時代 社殿の改築と無格社の合祀

曾我都比古神社と唱えられなくなった時期

日本武尊命石板奉納

(以上 一六八号)

### 二 構内社

1 攝社

2 末社 宿弥社 稲荷社

3 その他 阿夫利社 十郎五郎社

構内の配置

### 三 お祭り

平安期から北条時代 安土桃山時代

江戸時代 明治時代 大正・昭和時代 現在

国立史料館蔵神社明細書

(以上 一六九号)

### 四 宗我神社と神主

宗我神社創建時代 北条氏時代

徳川時代 幕末(神主養子縁組・宗我播摩守の住所) 明治以降略譜 御支配関係

(以上 一七〇号)

宗我神社の勅化(以上 一七一号)

### 曾我谷津の曾我氏とその末裔

#### 一 曾我氏創立時代

#### 二 曾我氏滅亡

#### 三 神保家帰農(以上本号)

正泰寺 神保家城地拜領

曾我太郎祐信屋敷跡 堀の跡と城内開発 若宮八幡宮 矢の根井戸

#### 四 旧阿弥陀堂

所在地 大光院の斜め前梅林所在説

#### 五 菊川稲荷

付 曾我神社と曾我氏の歴史総合年表

### 曾我谷津の曾我氏とその末裔(続)

九代 祐守 小四郎

応永廿三年(四二〇) 四月卒

祐家 分家相統同国小磯に住む

十代 祐久 小太郎

永享十二年(四四〇) 正月卒

十一代 祐春 式部介

文明十年(四四六) 五月卒

祐富千百石を宛行い分家相統

祐清 南條家相統

祐春家を継ぐ、文安二年(四四三) 將軍義政公賜本領安堵御教書

応元年間里見謀叛に出陣武州高崎の合戦で敗北、よって古屋重氏、村岡忠増、祐春力を合わせて駿河、伊豆、甲斐を馳せ巡り戦い敗北したので、祐春は上杉頼政にしたがう。文明五年(四四三) 將軍義尚公から本領七万石安堵の御教書をたまわる。

崎の合戦で敗北、よって古屋重氏、村岡忠増、祐春力を合わせて駿河、伊豆、甲斐を馳せ巡り戦い敗北したので、祐春は上杉頼政にしたがう。文明五年(四四三) 將軍義尚公から本領七万石安堵の御教書をたまわる。

応元年間里見謀叛とあるが応元という年号は無い。応永年間の誤りであろう。とするとその時の祐春の年齢が若すぎる。  
応永二十二年(四四五) 頃、管領持氏と叔父の満隆と不和になり、上総国長柄山胎藏寺に隠居していた前の執事上杉入道禪秀がこれに加担し、密かに兵を集めた。相模からは曾我中村、土肥、土屋が参集し、応永二十三年十月二日の夜、禪秀軍が関東公方足利持氏を夜襲した。持氏は難を逃れて鎌倉から小田原に来たが、こども土肥、土屋の軍勢に襲われ、箱根別当の案内で駿河の大森氏に身を寄せた。さらに駿河の今川氏に助勢を依頼し反撃に転じた。同年末に持氏軍の大森勢などによって曾我中村は攻め落とされ、応永二十四年一月十日禪秀以下鎌倉雪の下御坊で自害し、この乱は終わった。これが世に言う禪秀の乱である。(鎌倉大草紙)。

大森氏は此の功により、土肥、土屋の領地を賜り小田原に居を移し、以後曾我氏は大森氏の傘下に入ったと思われるが曾我氏の誰が禪秀の乱

にどうかかわっていたか不明である。武州高崎の合戦で敗北とあるが、『鎌倉大草紙』、『鎌倉九代後記』には、曾我氏の名は見えない。

十二代 祐高 兵部 明応九年(四九〇) 卒  
十三代 祐氏 左馬介 天文五年(一五五六) 卒

姉 南條高清算  
弟 祐時 兵部

分家相統 和泉の国宇治郡に住み、永正二年(一五〇五) 織田家に勤める。

弟 氏重 出家し、□文十八年当所実相役寺に住む。

祐氏家を継ぐ、永正五年(一五〇八) 義氏等と小磯、南湖で戦い敗北した。

伊予で黒田春信謀叛し軍勢領地に押し寄せ、終夜戦い家臣市川、牧島討ち死に残兵離散し、領地二万石減少した。祐氏追討軍を催したが急病で中止した。

氏重は曾我別所(原) 東光院、次に高野山で修行し、後に聖護院で修験道を究めて帰国し、曾我谷津字宮の台に在った廃寺同様の実相役寺を現在地に移し、大光院実相寺として中興し、永録元年(一五五六) 遷化した(大光院過去帳と伝承)。

中興の時期を大光院過去帳には文明十八年(四八六) とあるが、年代的に無理があり正しくは天文十八年

(吾父)の書き誤りと考えられる。  
氏重が聖護院で修行した経緯を推測するに、文明十八年(四六)聖護院道興准后が剣沢、山彦山(六本松)に来遊された際、宗泉寺に立ち寄りたためであろうから、それが縁になったかも知れない。

二 曾我氏滅亡

十四代 信正 民部大輔  
永禄二年(一五七)七月十八日卒  
妻 鎌倉赤羽根笹井傳吉  
娘 天正四年(一五七)二月卒  
娘 二人 早世

近在で四万石、上野で一萬石、伊豆で千石余を領していた。曾我城主將軍の下知に従わず、依って永禄二年四月一日大軍曾我城に押し寄せ、家臣は堅く守って矢、石を放って良く防戦したが、大手神戸口の守将神保刑部流矢に当たって死亡し、家臣よく防戦したが一方が崩れ落城した。家臣残らず城内で生害した。

前述の神戸口とあるは曾我谷津字宮の台、台畑である(『曾我地誌史料集』。此処は国府津、松田断層の急峻な断層崖の上に在り、下は小湖の近く守り易い所である。(図一参照))  
この戦いの將軍とあるは、北條氏康を指すものと考えられるがこの事は、『北条記』『史籍集覽』(関八州古戦録)・年表『小田原の歴史』

(内田哲夫編)にも見当たらないので小田原市史編さん室におたずねしたが不明であった。  
大北条とすれば赤子の手を捨るような戦いで、簡単に「かたついた」だろうと思うが、四月一日に改め始め、信正の最後七月十八日迄三月半掛かっているのに、記録に残らなかったのは何故だろう。

十五代 祐吉 甚九郎  
(帰農、神保家初代)実父南條氏清 天正十九年(一五九)卒  
妻(信正の娘)文禄三年(一五九)二月卒

祐吉 絶家を継ぐ、祖父祐氏、父信正二代の騒乱に依って領地退転し、宗泉寺並びに代々の書類残らず兵火のため焼失、冊子は持ち出せず系図一軸も所々焼穴にて見にくいので写しおいた。御先祖開基宗泉寺焼失に依って屋敷内に堂一字を建て、祐信公の木造を造立奉入し曾我堂と言う。

累代の石碑は宗泉寺にあったが兵火の節残らず焼失した。  
祐信公石碑、東の方青山嶺に建て置かれこの度の兵火にも愁い無く、今も連続している。御石碑は伊予の領分百姓共の信心に依って奉納された石である。

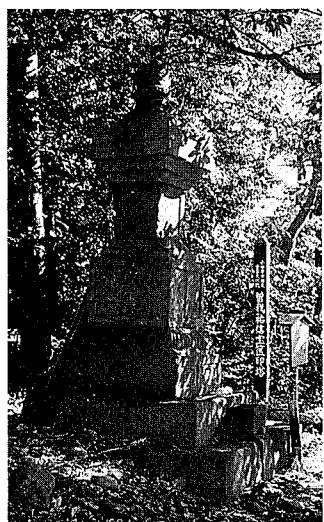
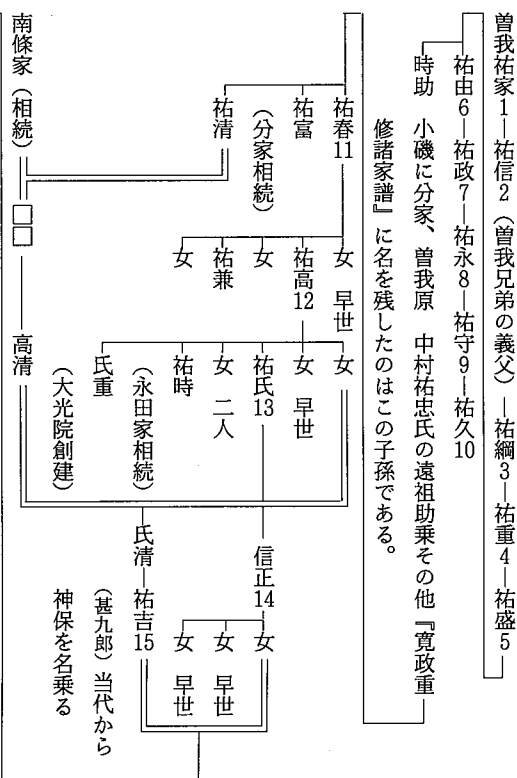
この石碑は、曾我山の中腹で、富士山が正面に見える風光明媚な神保

家所有地になり、小田原市指定重要文化財の曾我祐信宝篋印塔で、造立が不明とされていたものである。  
(図一―一六八号に掲載・写真参照)

三 神保家帰農

南條氏清の子、甚九郎、後に祐吉

神保家系図



曾我祐信宝篋印塔  
小田原市指定重要文化財

## 小田原七福神の誕生について

安藤 康哉

平成十年正月を期して小田原七福神が誕生いたしました。時あたかも小田原市の観光元年の幕明け、城下町観光都市として新たな一歩を踏み出そうとするその時とタイムリーな符合をみることになりました。

巷間、小田原という城下町なのに七福神がないのか、そんな素朴な疑問、要望や期待とが心ある人達の話題にのぼるようになってきた。昨今、寺院サイドからしても何とか小田原に七福神を、

という思いは各々のご寺院方も持つておられたと思います。特に七福神の各尊像を奉祀しておられる寺院では強い思いにかられていたと思います。

小田原市仏教会の一会員としてこうした要望、期待にどう応えていったらよいか、その方策はないのだろうか、と、たまたま拙僧の潮音寺には毘沙門天を奉祀しておることから、当時の山橋市長にこの件について自分なりの提言をいたしましたと



潮音寺 毘沙門天

ころ、是非実現して欲しいとの積極的な言葉をいただいたことでした。

さて、市仏教会(会長松藤英龍加盟九十八カ寺)傘下の寺にはそれぞれに大黒天、弁財天、毘沙門天の尊像は比較的多くお祀りされておりますが、布袋尊、恵比寿、寿老人、福祿寿の尊像はなかなかそれと確認することが困難であることがわかりました。そこで相模七福神

なり、西湘七福神なりと名称を変えて範囲を更に広げて、上郡、中郡、平塚市へと調査を行ったけれど、これ又大変難かしいことであることが判明しました。ここにおいて七福神の構想も一時、立往生の状態のまま何年かが経過してしまいました。

こうして消えかかった灯に点火する契機をいただいたのは、平成九年二月、真言宗圓福寺住職木内雅明師より七福神を結成しようという呼びかけがあった時からであります。師の七福神結成への情熱、悲願は実に切々とした力強いものであり、まことに心強い同志にめぐりあうことが出来たこ

とでした。加えて、師の卓越した企画性、行動力には心より敬服し信頼申し上げ、是非力を合せて実現にむけて突進しようと勇氣百倍したことでした。こうして再び点灯した七福神結成の第一歩がはじまったのであります。

そこでまず、七福神の七カ寺の結集がなされなければなりません。それには七カ寺の配置、宗派のバランス、巡拝コースの妥当性、観光バスの駐車の問題等いくつかの条件をクリアしなければなりませんし、まづは何よりも各寺がこのことをお引受け、各寺同志が協調し協力し実行していかうという意志決定がまず先決でなければなりません。幸い、小田原市仏教会の中にあって、木内師が中心となり七カ寺の結集について精力的に奔走され、各七カ寺のご理解とご協力をいただくことが出来、ついに有難い因縁が成就して布袋尊をはじめ福祿寿、寿老人、恵比寿の諸天神が誕生することが出来たのであります。

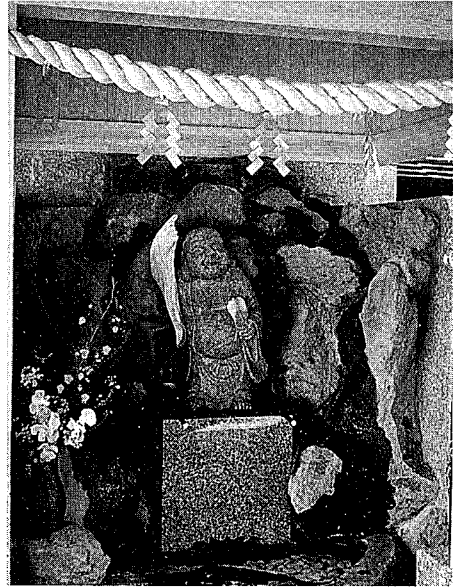
次に七福神七ヶ寺の配置について、そもそも小田原

の町は小田原城を中心にして発展しつつに関東一円第一の城下町として商業、文化の中心地となったのであります。七福神もこうした城下町発展の経緯を考えると、やはり小田原城を中心に東西南北に配置されるのが至当ではないかと考えました。例えば毘沙門天は別称、北方多聞天と申しますから、小田原城の北方を司どる守護神として北方に位置いたしますと、まさしく潮音寺の毘沙門天が存在することになります。南には相模灘に面し、海と船の神とされる恵比寿神の報身寺があり、相模灘の清風と怒涛のごとき激しい波浪を象徴する清濁合せのみ、福德財宝の布袋尊の圓福寺があり、海と星、星宿の化身といわれ福と禄(財宝)をもたらす福祿寿の大蓮寺があり、東に江ノ島明神を分霊した唯一の満願弁財天の福泉寺があり、西に延命長寿を与える寿老人の鳳巢院あり、出世財宝厨房守護の食物の神としての大黒天の蓮船寺があるというように、ここに各々の寺院が一つの点から一つの線へと結ばれて、小田原城を中心とした

ネットワークが形成されたわけでありませう。

また、宗派別に分類しますと、曹洞宗が三カ寺、(潮音寺、福泉寺、鳳巢院)浄土宗が二カ寺(報身寺、大蓮寺)、日蓮宗が一カ寺(蓮船寺)、真言宗が一カ寺(圓福寺)となっております。

駐車場については、特に観光バスの駐車については、一つには城址公園の駐車場を利用していただく。そこから徒歩散策しながら報身寺、大蓮寺、圓福寺を参拝され城下町の雰囲気味わっていただき、更に小田原駅西口駐車場を利用して、福泉寺、鳳巢院、蓮船寺へと徒歩で散策しながらの参拝もまた一段の風情があるのではないかと思います。



圓福寺 布袋尊

して最後に、潮音寺門前の駐車場を利用していただければよいのではないかと考えました。

更に巡拝コースについても、道中に町あり丘陵地あり、また静あり動あり、更には史跡あり、文学館などその他いろいろの事跡にめぐり遭うことも出来ます。いま盛んなウォーキングにも適度なインパクトがある妥当なコースではないかと思っております。

さて、本年正月からはじまった小田原七福神めぐりはおかげさまでそれなりの反響をよび、地元はもとより、鎌倉、藤沢、茅ヶ崎方面、町田、厚木、秦野、上郡の各町、南足柄市より多数の方々を訪れご参拝いた

できました。これもひとえに、関係各位の温かいご支援ご協力の賜ものであることを肝に銘じ厚く御礼申し上げます。今後この盛況を次年に引きつぎ更に一段の発展をしいかなければなりません。私も七福神会として、どのようにしていったらよいのか真剣に思案しておるところであります。それには各方面からの忌憚ないご助言ご教示を賜わり、「小田原に七福神あり」との名声四方に広まり高まっていきたいと思います。今後とも慶びと存じます。今後とも倍旧のご支援ご協力をお願い

### 喪中期間について

岩本宜明

迎春 穏やかな初日の出。明朝登山になったので、家中で墓参、賑わっていた。

岩本さんは、元日に箱根の冠岳に登山されるのが恒例になっておられる。

昨年四月に家内の兄を

い申し上げ、小田原七福神誕生の概要を述べさせてい

ただきました。(小田原七福神会会長)

亡くしたが、喪中が曖昧なのに当面して、解明を。国語辞典・漢字辞典では、字句の意味だけで基点不明。図書刊行会の『仏教辞典』に「いま都会では重服(父・母)のでも忌は初七日まで、喪は四十九日の忌明けまで」とあり、吉川好文館の『国史大辞典』では「親子は百日間兄弟姉妹は四十九日、従兄弟・従姉妹は七日間等、そのあと一年忌・三周年(一年忌)・七・十三・十七・二十三・二十七・三十一・四十九年忌などの年忌供養が続く」と。

……(以下略)……

去る一月二十五日、内房方面の初詣に際し、岩本さんから新年のメッセージを頂きましたので、会員の皆様へご紹介致します。

タイトルは編者が付けました。

## 根府川の福踊り

小野 意雄

波乗り舟の音のよさ

宝舟漕ぐ 春の海

なかには七福笑い顔

天から木槌が降って来て

大黒さんが打ち振れば

座敷のなかは金の山

唄い 難せや 大黒の

福は舞い込む 恵比寿顔

正月十四日、どんどん焼

きの日の夜である。子供た

ちの唄声、夜のしじまを

縫って聞こえて来る。わた

しの子供時代(昭和十〜二

十年頃)戦時体制の最中でし

た)、砧の音が聞こえて来

そうな静けさの寒い夜だっ

た。福踊りの子供たちは、

いま三軒向こう隣の○○

さんの家か。

福踊りは、道祖神(塞の

神・歳の神)を祭る子供組

の仕事の一つだった。この

踊りは、根府川だけにしか

伝承されていない。旧片浦

村四部落：石橋・米神・根

府川・江之浦の内、根府川

にしかない。古くからの、

いわゆる伝統民族芸能なら

ば、道祖神の祭りに関連し

ているとすればなおさら、

民俗として、それは残され

ているはずであるが、他の

三部落にも、周辺の近郷近

在にも、この福踊りはない。

なぜか。それは、この福

踊りが、関東大震災で大被

害を受けた根府川の村起こ

し活動のなかで創作された

芸能だからである。歌詞は、

アメリカから帰国したばか

りの、栢本さんところの娘

さんが作詞したという。フ

リは、村人みんなの合作で

はなかるうか。

この福踊りは、戦後の諸

事情のなかで、昭和三十年

頃から踊られなくなってし

まった。戦後の諸事情とは、

マッカーサーの命によると

か、集まったお金の分配の

問題とか、夜になって勉強

も大変なのに、子供がそん

なこと宗教的行事をする

のは如何なものかとか、学

校・PTAからの児童・生

徒の補導的観点が主だった

ようだ。それが、平成七年

正月、四十年ぶりに復活さ

れ、ニュースになったこと

は、記憶に新しいことであ

る。以降、毎年正月の報道

紙面を飾る風物詩になって

いる。その前に、無形文化

財の『根府川の鹿島踊り』

に、小学生も参加すること

になったというトピックス

もある。創作された謂れか

らしても、これからも郷土

芸能として大事にされ、伝

承されていくことが望まれ

る。大人も子供も、そうそ

う今は、女の子も一緒に踊っ

ている。

この小文は、わたしの子

供時代の追憶記録である。

復活された福踊りは、衣装・

装束、またドンドン焼きの

場所など、かつてとは少し

違っているが、復元に向け

ての、村の人たちの努力の

ほどが窺われる。これか

らのことを考えると、福踊

りを身につけた子供たちが、

新しい家庭で、職場で、年

頭の御祝儀に舞う姿も想像

され、楽しくなる。

「福の神が 舞い込んだ」

という喚声で、子供たちが、

玄関を大きく開けて家の中

に入ってくる。赤い襷がけ

をし、塞の神の石像を両手

に抱えた子が先頭、ついで

唄い手、そして二人の踊り

手。塞の神の石像が、上が

りかまちに置かれる。どん

どん焼きの団子を荷なった

子供たちもいる。今かいま

かと、近づいてくる子供た

ちの声に耳をそばだて、隣

家での子供たちの声を耳に

し、戸口の間集まり、子

供たちの訪ないを心待ちに

していた家の者は、石像に

手を触れ、家内安全・無病

息災を祈る。

「波乗り舟の 音のよさ」

唄と踊りが、始まる。

「宝舟漕ぐ 春の海……」

ゆるやかに、たたらを踏み

つつ、拍子を合わせ、鼓舞

するオカメとヒョットコ。

踊っているのは小学五年

生の子。唄っているのは、

六年生の子。踊り終わると、

唄い手と踊り手は、「笑う

門には、福来たる。おめで

とうございます。」と、舞

い納める。家の者は、子供

たちの年長者にお賽銭を渡

し、子供たちは持って来た

みたらし団子を家の者に渡

す。「悪霊神を 追っばら

え！」と大声で口々に言い

ながら戸を閉め、子供たち

は、つぎの家に廻り、村中

の家々に門づけして行く。

団子は、村内の各家々か

らお宮さん(寺山神社)、お

釈迦さん、山の神さん等に、

コナラの小枝に挿して、お

供え(奉納)されたもので、

総代(現自治会長)さんの

家で砂糖・醬油で甘辛にか

らめられた「みたらし団子」。

道祖神・サイトバライ(歳

途払い・サエトバレエ)のお

祭りの神饌を、供養する意

味がある。

踊り手の衣装・装束は、

腹のところにミノ漉しザル

を当て、覆うようにカスリ

の羽織を裏返し・後ろ前に

着て、腰には大神宮さんの

大注連飾りにお標を吊って

回し帯び、両手に扇子を大

きくひらき持ち舞う。扇子

には、子供たちの手により

日の丸が描かれている。大

注連飾りは、門松や古い御

札とともに上納された正月

飾り。扇子は、前年に結婚

された家から上納された御

祝儀の扇子。そして、踊り

手は、豆絞りの手ぬぐいで

頬かむりをし、顔に、一人

はヒョットコの面を、もう



寺山神社境内にて(平成七年正月十四日撮影)

一人はオカメの面をつける。つまり一人は男性、一人は合いの手の女性を演じる。

ちなみに、福踊りが中断

していた昭和三・四十年代、青年団の有志は、往時を偲んで、友人の結婚式で、福踊りを踊った。この時、男の子が欲しい花嫁さんはヒョットコの腹に、女の子が欲しい花嫁さんはオカメの腹に触れて、お願いをする趣向が採られたという。

道祖神は、村はずれの道端・広小路に、普通は祀られるが、根府川の塞の神の石像は、寺山神社の境内に祀られている。かつて、門づけ巡業の際に持ち運んだ塞の神の石像(小ぶりの座

高三十センチ弱)は、悲しいことに盗難にあい、今はないが、その小ぶりの石像も復元されている。

子供組は、小学一年生から高等科二年生(現中学二年生)までの子供たちで構成されていた。踊り手の五年生は親方、唄い手の六年生は新隠居と呼ばれ、高一年は隠居、高二年は古隠居と敬われていた。四年生は親方下と呼ばれた。一年生から五年生は、いくつかのグループに分かれ、親方の五年生がグループ・リーダーを務めていた。これは、子供組の荷なっている仕事をするためであった。

小学校六年は、ひとつの区切り。高等科に進む者、就職する者、中学校に進学する者に分かれていく最後の歳。五年生までに精一杯子供らしいことをして、六年卒業とともに、子供組を卒業する者もいたことが関連しよう。

歳の内、すす払いの頃、子供たちのいくつかのグループは、山の竹林に入り、どんだん焼きの櫓を作る竹を何束も切り出し、お宮さんの境内に運ぶ。海岸では別のグループが、浜石を動かして、直径六メートルほどの円い窪地を作る。この窪地に、櫓を組むのである。

歳があげ、三が日が終わると四日、各家々では門松を倒し、松飾りをとり、お宮さんの境内に運ぶ。子供たちも、「門松転ぐり返して大騒ぎ」と大声で囃しながら、「カザリモノ」集めをし、一緒に運んで、境内に積み上げる。これらは、毎日十三日まで、学校から帰ってから海岸に運び、少しづつ櫓に組んでいく。そして、四日から十四日まで毎晩、子供たちはお宮

さんの本堂におこもりし、祈禱する。塞の神(歳の神)にご祈禱を頼みたい家では、お願いごとを書いて子供組に届けておく。本堂には、前の年に子供が生まれた家から奉納された赤い幟が飾られる。子供が健やかに生育することを祈願した幟で、「奉納 昭和〇〇年一月吉日 氏名」と墨書されている。ご祈禱は、子供たちの着座、お燈明の点火、大太鼓の合図で始まる。(ご祈禱や塞の神祭りの諸礼式、役割分担や会計処理等については、省略する。)ご祈禱が終わると、一年生から四年生は、家に帰る。五・六年生は、福踊りを、先輩から教わる。

お祈禱は、「お唱え」といわれた。「お唱え」は、「光明真言」と「お願いごと」と「南無大師 遍照金剛」を、大太鼓のドン ドンという音と唱和させ、繰り返して、奉唱した。

☆ おん あばぎゃ べい  
ろしゃのう まかばだらま  
にはんどま じんばら  
はらはり たや うん  
◎ ○〇歳の男(女)のひ

とが、病気で難渋しておりますから、早速、全快いたしますように!

● ○〇さんの○○さんが、  
◇◇に、出征しておりますから、武運、長久、よろしく、お願ひ、いたします!  
◆ 南無 塞の神さん 村内安全 家内安全 無病息災! 根府川 村中 安全 なりますように!

★ 南無 大師 遍照 金剛!  
南無 大師 遍照 金剛!

十四日は、櫓作りの仕上げ。お焚き上げの火を点けると、一〜四年生の子供たちは、村中に、「オンビが燃えたぞう!」と大声で触れ廻る。村の人たちが、老若男女を問わず、団子を木の枝や針金に通して、三三五々と海岸に急ぐ。「オンビ」とは、御火。

子供たちは、自分の「書き初め」を燃え上がらせて、成績の向上を祈願したり、前述の上納された団子を焼き、総代さんの家に届けた後、火の始末をした。その後お宮さんに戻り、最後のご祈禱をし、福踊りの準備をして、門づけ巡行出発の刻を待ったのだった。







盗鶏を鶴として食べさせたか

雛形文書に「御飼鶏数多盗取、鳥屋江売払、殺させ候処実正」とあるので、この鶏肉が、五月十八日の通信使接待料理に用いられたと考えられる。とすると、最乗寺の訴えを受けた藩当局者が、外交問題にまで発展する事を恐れて、最乗寺への訴訟取下げ、関係者への事件抹消を図った可能性が大きいからである。

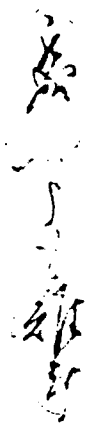
この事件を知らない通信使は、小田原の「杉の重箱に入った……料理は大変手の込んだものだ」と褒めている(『朝鮮通信使来聘覚書』P137)。ところが、次の第十一回通信使の宝曆十四年(一七四四)に、小田原藩朝鮮人方役所は、接待料理用に中嶋村(小田原市中町)から、鶴十九羽と卵一七五個を供出させている(『小田原市史』近世2P721)。

先例重視の時代だから、十回目通信使の接待計画は、鶴料理だったのかも知れない。とすると、通信使は鶴料理という説明で、盗み鶏を食べさせられた可能性がある。

第十一回通信使用の食材調達先変更その他、追及するとミステリーめくのでここで止める。しかし、盗まれ鶏が変身して、二五〇年後の現在、県指定天然記念物「大雄山の杉林」に成長しているだけでも、歴史は面白いのである。

注意してほしい語句

正確に史実を読み取る為には、墨のかすれや虫穴文字も解明したい。文意・文脈と当該・関連の文書等から推理して、字句・文言を当て嵌めて行く。面白いが時間がかかる。



A

なられもつすべくもはかりがたく(どんな罰)となるか予測出来ない。写真判でかすがが著しいが、すぐ前の「不申」では意味不合、この事件で、ほぼ同文の別文書があり、「可申」が適合した。



B

みぎおんとか、ごしゃめんくだされ。右の様な条件で罪をゆるされる。「否」は文脈から「咎・科」の誤字なので、隣に「咎」を書く。「赦」も崩しがおかしくて誤字なので、「赦」を並べる。



C

おちどにおおせつけられそうろうと  
・罰(罪)をあたえられても。越度は本来過失・罪の意味だが、文脈からは「罰」が適合する。「被」「共」も文脈・前出文字で推理する。

證文之事

① 此度、拙者儀、為二最乗寺鶏数多盗取一

朝鮮人御用ニ小田原宿江売候段、最乗寺江

相聞江、年番之現住透御立腹ニ而、小田原御役所へ

御訴可レ被レ成段、村役人中方へ御届ケ御座候処、

② 左様候而ハ、何分之御科可レ被ニ仰付一も相知レ不レ申、

一家・五人組ハ不レ及レ申、村中何程之困窮ニ被成

可レ申も難レ斗奉レ存候処、早速御訴招被ニ下成ニ御

訴無レ之候段、難レ有□レ存候。右過料として

来已春、杉苗千本植候様ニ被ニ仰付一依之

右御否御□免被レ下難レ有奉レ存候。此上村中

御苦勞ケ間敷義、一切仕間敷候。万一六ケ敷

仕出し候ハ何分之越度ニ被ニ仰付一候共、其時

一言之申訳ケ仕間敷候。為ニ後日一依而如レ件

同村

延享五年辰六月廿一日

八右エ門

岡野村

御役人中様

## 紅蓮洞・坂本易徳

(29)

## 岡部忠夫

相澤親之助は「馬鹿気

た話」に続いて更に「日本人と支那人」と題して『函東会報告誌』(第9号 明治23年6月)にアメリカ便りを寄稿している。

なお、親之助が支那人という語を用いても、當時はそこには見下しの意味はなかったと思われ、このことは前号でふれた。

日本人は、蒙古人ではなく大和民族とか神種であるとか、当時しきりに云われたことである。耳にすれば誠に受けの宜しい人物のように思われる。

しかし、日本人が支那人に似たのやら、それとも、支那人が日本人に似たのやら、外人には少しもその区別が出来ない。ただ、区別する基準は、日本人は、長幼の別なく赤髭白髭の輩と同様の衣服を纏い、髪をきっているのに対し、支那人は弁髪で支那服を着用していることから、両国人の見極

めをする。

だが、支那人の中に往々欧米の服を着て行商する者も居り、欧米人はこれを見て日本人だと見る。

ところで、支那人は、諸君も既に御承知のように米國にては大いに評判が良くない。

彼らは、生命が財産やら財産が生命やら一向にその区別がつかないため、金さえあれば命はいらぬとまで評されている。それだけではない。その傾向があるため遂には他人の物まで盗むようになり、支那人は盗賊なり、と云う人は欧米だけでなく、わが国の人も申すほどである。この世界各国から卑しまれた人物に類似して生を受けた大和民族すなわち神種の不幸は如何ばかりであろうか……。

特に近ごろ、弁髪・支那服はアメリカで受け入れられず、服装を変えるようになったため、今や日本人の価値は地に落ちようとして

未だ落ちないのを幸いとして、その良い評価を維持しようとしている。

嗚呼、かの支那人の賢愚正邪狡猾などの点はとてま及ぶもつかないが、つまるところは日本人の当地に於ける待遇が劣等なのは、この支那人の為ではないか。あるいは、他に原因があると云う者は、直接サンフランシスコに滞留することに より、その実情を掴めると思う。私は、とてもこれを筆にすることは出来ない。

親之助は、アメリカに於いて日本人の待遇が劣っているのは、支那人の為であるとしている。

親之助は、儒学を学んできている。「志士仁人は生を求めて以て仁を害することなし」の論語の言葉を体得していたであろう。儒教の根本理念である「仁」の思いやり、慈しみの心は、アメリカに渡ってきた支那人には通用しないと思っただけかも知れない。親之助が知らず知らずの中にナショナリズムの気持を台頭させたのも、雑草のように逞しく生き抜く支那人に対

して、戦きを心の中に包み込んでいたからに違いない。

中国人が生活力の旺盛なことについては、現代でも変わらぬ。

四年程前、ニューヨークに駐在していた義弟の家を拠点にアメリカ東海岸を旅した時のことである。中華料理を食べようとニューヨークの中国人街を案内されたことがある。至る所中国語の看板だらけで、孔子の像までが立っている。ここがニューヨークなのかと思う程であった。道路こそ幅員があり車道、歩道と分かれているが、八百屋、魚屋、雑貨屋の店頭に雑然と並べられた商品は、勿論、ガラスのケースの中にはなく剥き出しで、何とはなしに不潔な感じがした。同じ中華街でも横浜のような整然さがなく、マンハッタン通りの美観とは大きな差があり、雑踏が目立った。だが、そこには何か知れぬ活気が漲っていた。隣接のイタリア人街が中国人系に侵食されていると云う。

れた能力を持つ者は、アメリカに於いて素粒子論の解明や、先端技術の半導体・コンピュータなどの開発に貢献していることを記さなければならぬまい。

相澤親之助は、その後たびたび『函東会報告誌』にアメリカ便りを寄せているが、アメリカの教育に就いての通信が多い。明治二十五年(一八八二)七月十日付けの便りも、アメリカの教育に就いての感想をよこしている。彼は、渡米してから日本とアメリカとの経済の段違いにかけ離れた現状を見て、この差を埋めるには教育しか無いと思っただけに違いない。

アメリカは、世界で類のない一種特異の国である。世界の強国、英・独・仏・伊の人種が移住して国を成しているのは、周知のことであるが、各自みな、互いに負ず劣らず競い合う気概を持っている。昔は戦争の手段に訴えたが、今ではこのような殺伐無残な方法を取ることが難しいのを知り、

人々は商業・農業の二つの分野で競争し勝ち抜くことが必要であると考へ、各国出身者は、熱心にこの二つの分野に打ち込んでいる。

従って教育の方針も、何時とはなしにその影響を受け、農商の二つの領域に重点が置かれていた。大学は、学問の蘊奥(うんおく)を究めるところであり、その影響は受けにくい、中学校、小学校共に農業、商業に関する本を読んだり、計算したり文を書いたりする等、実務の勉強をすることが勧められ、文の意義や言葉の意味にこだわることは、避けているように思われる。

「金は即ち富であり富は即ち権力である」と云う言葉は小学・大学ともに通用している。考へれば、世界列国中で強国と言われる国は、一つとして富を以て基としていない国はない。

英・米・仏・独の富は、遙かに他の諸国を越えて及びもつかない。我々一個人の間においても、権力は、貧しい者より富む者が必ず勝っていることは云うまでもない。

殊に我が日本をみると、国会、府県会、町会、村会

何れも富による制限選挙制度を採っている。つまりは、富が持つ権力は、世界の全てに及ぶことである。

アメリカが、その富が世界に超越しているのは、地形、風土も関係しているのは元よりであるが、教育が与って力あると思われる。

小生、当地の二、三の学校に学んだが、校長の毎週の講話からその概要を察すると、教育の方針は、常に身を富まし家を富まし国を富ますような話にたどり着き、富を得るために学業を放棄するのは、構わないとは決して云ってない。

また、僻地と雖も、公立の小中大学など設けないところはなく、その学校が、国立・州立・府立の公立によるものは概みな無月謝、無試験にて入学を許可し、就学者に便宜を計っている。

私立の場合は、大抵月謝年謝が必要で、月謝は三ドルから十ドル内外で、年謝はこれに順じている。当地は生活の程度が高いのでその費用もこれに順じている。それ故、私立諸学校に学ぶ者は、多くは富豪の子弟のみである。

官公私立の学校は共にその資格は同一で、卒業証書の学位何れもその値打ちを持っている。日本では官尊民卑の風習から今でも抜け出せず、従って教育にまでにその風習の及んでいいるのは、嘆かわしい次第である。官立諸学校に学ぶ者に兵役免除をするなどは、その弊の大なるものである。

明治十二年(一七九)の徴兵令の改正により官公立師範学校、中学校以上の卒業生は平時兵役免除となつたが、同十六年の改正で官公立学校生徒は平時徴収猶予となり、規則がかわり、その範囲は狭まったものの、私学にとつては、志願者の減少となり由々しき問題であった。勿論、相澤親之助の考へは違つて観点からと思われる。

日本でも、諸事を速やかに自由闊達にする何か工夫ありそうなものだと、考える次第である。家屋や飲食物の改良論も大いに関係ありそうな感じもする。ともあれ、教育の方針を良い方向に導けば、諸事は

速やかに改まることは必然であると思う。

その後、相澤親之助は、サンフランシスコからサンディエゴに移った。一八九二年(明治二十五年)十月のことである。

サンディエゴは、カリフォルニア州際南西部の太平洋岸に面しており、カリフォルニア州では白人が定着した一番古い地域である。

親之助の便りは、サンディエゴは一七六八年にジェスイット会員がその居を占めたところと記す。ものの本によると、一七六九年にスペインの布教所が最初に置れた所とある。また、他の本(J・トレーガー著、鈴木主悦

訳『世界史大年表』平凡社)によると、一七六九年、ホセ・オルテが率いるスペインの偵察隊が一七六九年にモンテレーの北の湾を発見し、アッシジの聖フランチェスコに因んでサンフランシスコ湾と名づけ、スペインのカルロス三世は、カリフォルニアに二十一の伝導所並びにサンディエゴ、サ

ンフランシスコなど四箇所に武装駐屯地を置くことを許可したとある。

一七六九年と云うと、日本の歴史では明和六年に当たる。へんな引用だが、その二年前には関東で採れた綿実(綿)は、相州足柄下郡早川(小田原市)に集めて絞(絞)り灯油にして、それは江戸の間屋に売り渡せと、江戸幕府は指令を出している。江戸に人口が集中して灯油に事を欠いていたのである。キリスト教禁止を建前に、寛永十六年(一三九)鎖国して、国内の体制の維持に腐心してきたわが国と大分趣が違つた。

サンディエゴは、古い歴史の重厚感を持つスペイン系の町並みを保ち、年間平均気温13度から20度の快適な亜熱帯気候で居住の適地であるが、親之助は、ブドウ・ミカン・リンゴその果実の産地としてロサンゼルスとともにに著名な処であると、触れているだけである。親之助にしてみれば、教育のことが一番気にかかる事柄であったに違いない。

## 酒匂雑考三題

川瀬 春雄

酒匂の東海道を流  
れていた小川とそ  
の源流酒匂堰

昭和四十五年迄酒匂の国道一号线(旧東海道)の山側の家々の軒下を東から西へ幅四尺程の小川が流れていた。

年輩者なら誰でも知っている筈である。

ところが年々増加する交通量のためコンクリートで蓋をしてこれを歩道として了ったのである。今では当時の小川の面影は何もないが、この名もない小川は、酒匂の人々にとって共に永い年月を歩んできた大切なものであった。

町の中程山側の絹屋酒店の西隣小島家の横から国道へと右折した小川は、町の西端法船寺の前を、今は姿を消した連歌橋の袂で菊川に流れ込んでいた。

小島家から更に上流を通ってみる、七十メートル程で裏通に出て左折し、また八

十メートル程で右折し、印刷局工場西門前から東海道線の下を通って酒匂大道から巡礼街道に出会う二十メートル手前でこの小川の源は終っている。ここには北から幅六メートル程の昔から酒匂堰と呼ばれてきた人口川が流れていた。酒匂村を流れていたこの小川はこの酒匂堰の分流であった。

この酒匂堰は、水田へ配水する為に造られた。造られた年代は、明確には分からないが慶長年間であると伝えられている。

この酒匂堰から分水された水は、酒匂地区今の印刷局の敷地になっているあたりの水田に水配りその余り水が常に村の中を流れ、洗い物や撒き水等生活用水として使われ、その上火災に備えての用水であった。この事から考えると集落の西端法船寺の門前から絹屋酒店の横迄の四百メートルの流れによって一軒並びの細長い集落全体の生活に密接

な係わりあいがあった訳である。この流路が集落北側の水田地帯から小島家の横を経て東海道に流したのは、只の行きあたりばったりではなかったのである。この流路が造られた慶長の頃の酒匂集落の東端は絹屋酒店あたりであったに違いないのであろう。こうした事を考えるとこの流路は、最初から計画的に集落全体を守る為に造られたものである事が分かる。

ところで近年は、巡礼街道周辺や酒匂地区は人口の増加で水田が殆んど消えてしまった。酒匂の町を流れたこの小川の役割もなくなり、歩道の下にかくれた溝に水の流れる事はなくなった。最近では巡礼街道の下から酒匂の法船寺の前迄大部分が蓋をされていて小川の流れのあった事を今は知る術もない。

酒匂堰について云えば、松田町で酒匂川の水を分流し南下して途中の村々の水田に配水して今の印刷局工場の西北隅の所で東に折れ印刷局工場の裏側を直流して国府津親木橋と流五十メートルの森戸川に流れ込んでいる。今でも巡礼街道以北

には水田がまだ残っていて、酒匂堰の役割はまだ長く続くことであらう。

## 酒匂の町に散在している小形五輪塔

最近では注意して見ても余り見かけなくなつたようであるが、昭和五十年代の頃には町の所々に小さな五輪塔のくずれたのが十数個位積んであった。

昭和四十六年頃酒匂神社前の大経寺裏の小川の護岸工事をした時に川底から三基分程が発見されている。この横町の道祖神のわきにも十個程が積んであった。これらは何れも小形のもので筆者がざっと調べたところでは八十基分程あった。国道海側の寺の入口、又明治の頃迄上輩寺の海側にあったという南蔵寺跡には、五輪塔が五、六基残っている。国道山側では上輩寺本堂の前も十基分程積まれている。

酒匂町の五輪塔と言えは何と言つても上輩寺の大銀杏の下にある高さ二メートルの三基の五輪塔である。この大型のものを初めとして町に散在する多くのもの

は、酒匂の歴史に一時代を物語る遺物である事に間違いない。

このように多くの五輪塔が墓石として造られた年代は、今から丁度七百五十年前鎌倉幕府の末の頃執権北條時頼の年代である。この酒匂に酒匂右馬ノ頭と呼ぶ豪族が勢力を張っていたらしい事が考えられている。

この右馬ノ頭によってこの地上輩寺、中輩寺、下輩寺、の三寺が建立されたという事が知られている。上輩寺の三基の大型五輪塔は右馬ノ頭の墓石であったか、或いは右馬ノ頭と深い関係があった事に違いないのであろう。そして、今酒匂町に散在している百基近い小型五輪塔の主はおそらくこの右馬ノ頭の家臣として仕え、常時は農耕に従事し「いざ鎌倉」と言う時は槍を持って主君右馬ノ頭に従って戦陣に加わると言う生活であったと考えられる。また、この小型五輪塔が当時の村民の住居区全域に散在している事と百基近い数から考えると、村民のほとんどが、右馬ノ頭の家臣であり、農耕の武士であったと考えられる。(続)

### 新刊紹介

◇人生万華鏡  
◇ピエロの国家

著者 片岡一郎

発行所 小田原 八小堂  
価 二四〇〇円(二冊セット)

著者は既著四冊のうち『骨董と人生の旅路』(昭和58年刊)、『老いの戯言』(同61年刊)の二冊では、古美術に関する随想や身辺の偶感を主に記しているが、年三、四回、世界を旅するようになって、目の付け所が変わってきて日本と諸外国を比較して見るようになり、『日本の社会構造は極めて異色で、くされ切っており、このままでは、日本の前途

に未来はない」と、心に深く刻み込まれたと云う。そして『何が何だか分からない』『何が悪いのか』(同年刊)の二冊では、日本の政治、行政、社会悪、教育悪などをえぐった文が主になっている。今回新たに刊行された二冊は、既著を継承した内容で、東泉院の岸達志氏は「その主張には賛成しかねる点もあるが、保守反動ではない」「その生きかたに合理性がある」と、含蓄のある評をされている。なお、阿川弘之氏の近刊『国を愛して何が悪い』(文春文庫)と同じ内容ではないが、共に警世の書としても差し支えあるまい。



### 落穂集

◎去る一月中旬、お堀端通りを自転車で駆け抜けて行く後姿の妙齡な人がいた。毛を赤く染め皮ジャンパー姿でグラマーである。こちらも自転車なので、以前ならば、抜かれてたまるかとスピードを上げるところなのに齡のせいか遅れても気にしなくなった。昨今の娘さんの元気の良いこと、それにしても染毛したのがハッキリ分かるように、頭のとっぺんが黒く残っている。本人は気がつかないのだろう。若い娘さんならば、もっと身だしなみに気を付けるの

だろうに、と思っていると、信号の所で追いついた。彼女は振り返った。見れば透きとおるような皮膚といやに高い鼻が印象的であった。日本人とばかり考えていたが、とんだ見違いだ。◎『小田原史談』No.171の『町立小田原高女絵葉書』を「昭和初頭か?」としたが、関連の絵葉書から大正大地震前のものであることが判明。

### 小田原史談会行事

#### '98初詣内房の旅

平成十年一月二十五日(日)

「講師」山口一夫氏  
「コース」小田原駅表口七

時 松田IC 海老名SA 横濱町田IC 海ほたるPA 木更津金田IC 證誠寺 高倉観音(高蔵寺・坂東三十番観音) 金谷(昼飯) 鋸山・日本寺大仏 金谷港 久里浜港 ペリー上陸記念碑 佐原IC 横浜町田IC 松田IC 小田原駅前十八時

「海ほたる」の雑踏



四十分

「参加費」七千五百円

「参加者」一号車 富田千春、吉池 清、向山重忠、山口一夫、杉山竹二、曾我保夫、中代昌男、早野廣司・尊子、小林房子、本多トキエ、田中静雄、斎藤清一郎

「海ほたる」にて



木更津・高倉観音



特別賛助会員



鑿山・日本寺大仏前にて

森美那子、綾部ユキ子、細谷 洪、田島マサエ、久保喜久江、杉山房枝、増田任司・頼子、田中千恵子、植村壱子、瀬戸崎雄、小川武朗、中野恒郎・文子、相原俊夫・佐知子、村山千鶴子、植田博之・尚美、三橋国雄・美佐子、剣持芳枝、山口廣子、譲原栄一、府川宏江、川添ヨシ子、高城敏子、勝俣淳一郎、市川一郎、鈴木孝、神尾隆之、稲毛平吉

河本登志、真壁文子、三尋木啓子、小室泰子。二号車 木曾正雄・シゲ、岡部忠夫、岩本武、岩本宜明、勝俣末子、石川タカ子、隱岐真弓、片倉容子、額田好男・常子、遠藤茂子、三皆文子、加藤松枝、形岡たみ子、伊藤高子、伊藤喜美代、下川茂三郎、川人あい子、斎藤貴美子、田口鏡子、山口美知子、湯川玲子、中尾繁雄・美登里・佳子、田

中ヒサエ、佐藤一江、伏見弘、佐宗正雄、村山ミヨ子、鶴井道泰、高田知予子、中田智・郁子、滝野国雄・幸江、田中儀平・幸江、竹井貞雄・弓子、本多孝三・康子、穂坂行雄、野口あいこ、田島みちえ、杉浦恵二、遠藤定雄。

◎紙面の都合により「露国日露の役俘虜のこと」「生かされて私の軍隊体験」「小豆山の死闘」「赤い夕日」が沈む私のシベリア抑留生活Ⅱ」「小田原の富士信仰」は次号以降に掲載致します。◎『小田原史談』総括編第三巻の発行を、先に三月と、お知らせしました。が、予想外に索引の校正に手間取り、発行は四月にずれ込むかもしれません。



以上九十六名

宝飾専門店 JEWELRY Shimano 正 榮 堂 玉  
中華料理 昇 玉  
杉山水道工業 齋  
辰寿堂スポーツ 産  
大 営 不 動 産 毎  
刊きょうどん 小田原城趾前田 海  
割烹 お る  
茶半家具株式会社 宮  
ちん 聖 う 本 店  
土谷建設株式会社  
角田ガクフ子 店  
東京電力(株)小田原営業所  
株式会社 東 華 軒  
ト ー ホ ー 建 物 齋  
鳥 か つ 樓  
和菓子 菜 の 花 店  
八 小 堂 書 店  
八 子 マ サ 店  
平 井 書 店  
富士写真フイルム齋小田原工場  
株式会社 報 徳  
\* 町 松 坂 屋  
学生専科 丸 マルク  
諸星運輸グループ  
株式会社 美濃屋吉兵衛商店  
みみづく幼稚園  
ヤオマサ株式会社  
山口菓子舗  
株式会社 ユアサコーポレーション小田原製作所  
防災器具 優 光 社

智恵袋 相田酒造店  
小田原銀座 アオキ画廊  
熱海 アオキクリニック  
足柄香粧株式会社  
飛 多 魚 席  
紳士服の アメリカヤ  
(株) アルファ  
税理士 石原和夫事務所  
画材 ガクブチ ヴィウエ  
伊 勢 治 書 店  
伊豆箱根トラベル小田原  
かまぼこ  
株式会社 小田原魚市場  
小田原ガス  
小田原市農業協同組合  
小田原報徳自動車  
株式会社 オートセンター・スギヤマ  
共 小田原中央青果株式会社  
オリオン座  
かまぼこ 籠 清  
令 学 苑  
鐘紡株式会社小田原工場  
力ネボウ化粧品鴨宮工場  
神尾食品工業株式会社  
木地挽 日下部産業株式会社  
かみやま小児科クリニック  
興 電 社  
小 伊 勢 屋  
国 府 津 館  
(有) 小松石材店  
さがみ信用金庫  
趣味のふく さくらい

小田原史談(年四回発行)

年会費 普通会員三千円  
〇〇一〇一三六四三三六